



### Concert シュルトがミュンヘン室内管の第4回定期演奏会を指揮

1月26日、昨年10月に首席指揮者に就任したクレメンス・シュルトが、ミュンヘン室内管弦楽団2回目の定期演奏会を指揮した。「夜想曲」をテーマに、62年生まれのステファノー・ジェルヴァゾーニからブリテン、モーツァルトと時代を遡っていく構成だ。

ミュンヘン室内管は現代曲の紹介を、楽団のいわばライフワークとしている。たとえ、突飛過ぎる響きが続き食傷気味になっても、楽しそうに体の中から湧き出るようなシュルトの指揮で音楽が生き、最後には客席にいる作曲家（ジェルヴァゾーニ）を見ることができると、観客が不慣れな現代音楽への距離感を縮めることに成功している。

続くブリテン「夜想曲」では、ドイツ・リートの本場でも高い評価を得ているイアン・ボストリッジが、母国語でひとり芝居のように熱唱した。室内管弦楽団の響きに同化させた声と美しい英語で、高音から低音までをドラマティックに操るさまは適役だ。美声よりも劇性を優先しながらクライマックスに至った。

後半のモーツァルト「セレナーデ第9番」は、現代曲続きで端正な和音に飢え

# Scramble Shot



首席指揮者に就任して2回目の定期も成功したシュルトとミュンヘン室内管  
© Florian Ganslmeier

た耳に心地よかったが、何よりもシュルトの音楽作りがモーツァルトを最高に輝かせた。全身を駆使した指揮で紡ぐ楽想は軽やかで、喜びに溢れた活力に満ちている。ソロ楽器の歌わせ方も上手く、各奏者の力量が光り、能動的に語りかけてくる。それが「アンダンティーノ」になると、地を這うようなレガートに徹し、その対比を堪能しているうちに「フィナーレ」となった。楽団関係者がシーズン・オープニングからこのコンサートを推していたのが納得できる演奏会となった。

(中東生)

